２００５．１１．２５
No.１３６

編集　樋口　みな子

E-mail
minginga@agate.plala.or.jp
郵便振替
「銀河通信」02740－7－56535
（６号分1,000円）

愚直にひたむきに

今年も残すところ１ヶ月になりました。北海道は雪が降りました。ささやかな庭の冬囲い、車のタイヤの交換も終え、長い冬に備えています。皆さまは風邪など引いていませんか？

９月に１３５号を発行してから、１０月は、日本山岳会１００周年記念祝賀会に東京へ、帰宅してすぐに、道南の島牧村の小中学校で、大平山の素晴らしさを伝える特別授業（別ページの記事を参照してください）、そして今月１９日に行われた、高山植物を守るための市民フォーラムの準備と多忙でした。

山の技術はまだ未熟ですが、弱音をはかず、ザックの重さに耐えて、ひたむきに体力をつける努力をしました。かつての通信に比べると山の話題が８割といわれるほど、山、山、そして、沢にも初挑戦した年でした。家族はあまりにも忙しくしている私をみて「どうして、そんな厄介なことを引き受けるの？」といわれましたが市民フォーラムを終えたときには「司会は上手にやれたの？」と労いの言葉をかけてもらいました。実は、電話をかけるのがとても苦手でした。以前、自然保護団体の機関紙の編集をしていましたが、原稿依頼の電話が苦手で、電話の前で立ちすくんでいたこともあるほど。今回は必要に迫られて、多くの人に連絡の電話をしました。用件を的確に伝える訓練になりました。

先日の東京国際女子マラソンで優勝した高橋尚子の言葉がすてきでした。「暗闇にいる人や苦労している人に夢を持てば必ず光が見えるんだと伝えたい、どうか夢を持って、一日一日を大切に過ごして欲しい」と語ってましたね。私も、非力ですが、愚直にひたむきに努力したいと思います。

今年最後の通信になります。数年前から年賀状を通信で出すようになりました。読者以外の方にもお世話になった方々にお送りします。来年も引き続きご愛読よろしくお願い致します。振込み用紙を同封しますので、ご協力お願いします。

05.11.19 司会するみな子

190人も集まった市民フォーラムでは司会を担当しました。スムーズに進行できるようにシナリオを用意して臨みました。講演者のお話もまとめながら落着いてでき、苦手意識を克服できました。（み）

高山植物を守って！市民フォーラム開催

１１月１９日、「滅びゆく高山植物を守るための市民フォーラム」が北大学術交流会館で開かれ、午前の部、午後の部合わせて加盟団体のメンバーや、市民１９０人が参加しました。

第１部の高山植物保護活動を振り返るパネルディスカッションでは、ネットワーク委員長で北大大学院教授の小野有五さんがコーディネーターとなって、アポイ岳ファンクラブ、雨竜沼湿原を愛する会、エコ島牧、山歩集団青い山脈、ユウパリコザクラの会のそれぞれの団体から、地域の山の現状とパトロール活動などが報告されました。

アポイ岳ファンクラブの水野洋一さんは、アポイ岳が国の天然記念物になって半世紀たったが、ヒダカソウが５分の１に減少し、今年からカムバック１９５２に蘇らそうと「アポイ岳再生委員会」を発足させたこと。

ラムサール条約湿地に指定された雨竜沼湿原の保護活動をしている、雨竜沼湿原を愛する会の佐々木純一さんは、木道がＳ字形カーブは湿原入り口から約１、６キロの地点にあり地盤が崩れ毎年冠水するため傷みが激しく、湿原の植生への悪影響が懸念されている。愛する会は４年前から、木道を撤去して湿原外周に迂回路を設けるように支庁側に求めていたが、やっと要望を聞き入れられたいきさつを報告しました。

大平山の現状はエコ島牧の吉澤隆さんが今年の春に登山口まで道路が開通して４０人もの団体での登山など、植生への影響が懸念され、何らかの規制措置も必要と発言。

大千軒岳のパトロールについて、山歩集団青い山脈の清水和男さんが、２０数人の会員で交番を組んでひたすらに１７年間もパトロールし続けてきたことを。

夕張岳の保護活動を、ユウパリコザクラの会の水尾君尾さんが、ロープによる保護保全の変遷を保全していなかった１９９２年から今年までの１３年間を写真資料で説明。昨年、教育委員会がロープを撤去して、高山植物が踏まれている状況や、それに変わって木柵が付けられたが、踏み込みやすく、ナンブイヌナズナや、エゾミヤマクワガタなどの生息地が踏み付け跡が非常に多いことなど報告しました。

フロアから、崕山自然保護協議会の山岡桂司さんが、１９９９年から入山制限を継続してきて植生が回復したことや、登山者の意識もおおむね高山植物を守るためには入山制限は有功であるという意見が多かったと発言しました。登山のありかたを考えさせる場になりました。

午後からは、講演と利尻・礼文の高山植物保護活動や、植物写真家の梅沢俊さんの講演など、盛りだくさんでした。

北大地球環境科学研究院、助教授の工藤岳さんが、「高山植物と雪の関わり　そして地球温暖化の影響」について講演。多様な高山植物が共存できるのは、雪の積もらない風衝地と、夏まで残雪が見られる雪田で、生育場所を決めていること。高山の厳しい気候環境を反映して、昆虫の種類や量は季節とともに大きく変わること。マルハナバチの習性など、地道な観察でわかったことなど話され、地球温暖化が高山植物群落の多様性を大きく損なってきていることが、温暖化実験で証明できたことなど、興味深いお話に氷河期を生き抜いてきた高山植物を失ってはならないと改めて考えさせられました。

利尻島自然情報センターを主宰する小杉一樹さんは利尻山、鷲泊コースと沓形コースが合流する、通称合流点付近を中心に登山道の侵食、拡幅、裸地化が進んでいること。

環境省によるグリーンワーカー事業を地元市町村、宗谷森林管理署などが「利尻山登山道等維持管理連絡協議会」が受託して、土嚢を作成して登山道の侵食の深い谷部にステップ状に一個ずつ設置したことを報告しました。「登山道にやさしい下山の仕方を考えて欲しい」と結びました。

礼文島のレブンアツモリソウの保護活動に取り組んできた、レブンクル自然館の杣田美野里さんは、１９９７年にレブンアツモリソウ群生地で大量の盗掘があったが、奇跡的に助かった１株が、今年８年経過して開花したこと、パトロールする夕方は、霧と風と雨が多く大変さもあるが、時には素晴らしい夕焼けに出会うこともあると語り、盗掘からレブンアツモリソウを守るには、培養苗を販売して市場価格を下げて普及することも模索していると語りました。

北海学園大学教授であり、高山植生の生態学などを研究している佐藤謙さんは、現状調査とモニタリング調査の大切さを強調しました。

植物写真家の梅沢俊さんは、文献で調べてもなかなか見つけることができなかった珍しい植物を稚内のお寺の庭で見つけた話など、いつもと違う切り口で目立たない花たちを紹介しました。

最後にアポイ岳ファンクラブの久野真紀子さんが「未来をになう子供たちに、高山植物を守ることの大切さ、山の自然の素晴らしさを小さいときから知ってもらうような教育をみんなでつくっていきましょう」など７項目のアピール文を読み上げ、参加者の拍手で採択しました。

33 札幌圏　2005年（平成17年）10月29日（土曜日）　北海道新聞

高山植物保護 カギは市民意識

盗掘防止ネット 4年ぶりフォーラム

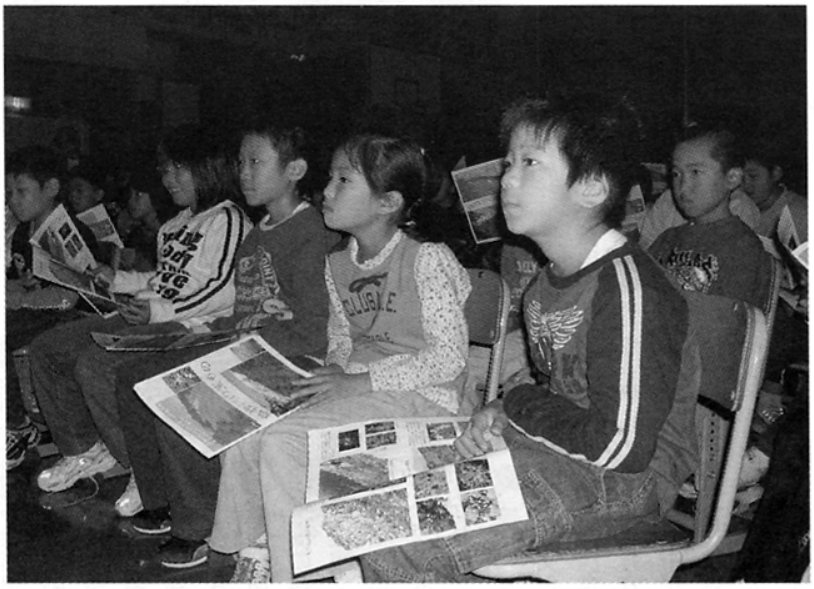
研究者が島牧村の小中学校で特別授業

高山植物 どう守る？

樋口みな子

貴重な高山植物の保護活動に取り組んでいる研究者らが先月19日、島牧村の小学校と中学校で特別授業を行い、子どもたちに「大平山、狩場山は島牧村の宝もの。どうしたら高山植物を守れるか、みなさんも一緒に考えてください」と呼びかけました。

特別授業をしたのは、北大大学院地球環境科学研究科教授の小野有五さんら北海道高山植物盗掘防止ネットワーク委員会のメンバー。島牧中学校では全校生徒61人、島牧小学校では3年生以上の児童64人が講師の話に耳を傾けました。



「島牧村って、すごいところなんだ！」＝10月19日、島牧小学校

大平山 狩場山は島牧村の宝もの

登山者の急増によって貴重な高山植物群に盗掘や踏み付けなどの被害がひろがっていることを憂慮した同村の藤澤克教育長や、市民団体「エコ島牧」の吉澤隆さんらが中心になって準備を進めてきました。

島牧中学校では、体育館に集まった生徒たちが札幌からきた講師を緊張の面持ちで出迎えました。

小野さんが、前日に出来たばかりのカラー刷り副読本などを使い、氷河期に北海道とアジア大陸が陸続きになったこと、大平山や狩場山の高山植物は、3万年前の氷河期にはるばるアジア大陸から渡ってきた植物であることや、島牧あたりまでマンモスやナキウサギがいたことを説明すると、中学生たちはぐんと島牧の自然に興味がわいたようです。縄文時代の6千年前の北海道はまた島になり、マンモスは死に絶え、ナキウサギや高山植物は山の高いところに逃げていきましたが、大平山や狩場山は、急な石灰岩のガケや雪崩地、雪田などのおかげで固有種・希少種のキリギシソウ、オオヒラウスユキソウ、キバナノアツモリソウ、ホテイアツモリなどの高山植物が生き残っていると話しました。

その後生徒たちは、学年ごとに10人ずつ6つのグループに分かれ、北大院生、教員、事務局員も生徒たちの中に入って「大平山を守るにはどうしたらいいか」を話しあいました。「登山ガイドやパトロールする人と一緒に登ってもらう」「登山を有料にする」「貴重な高山植物を大事にしようという看板を立てる」「花のあるところを歩かせない」などたくさんの意見が出ました。同様の授業を島牧小学校でも行いました。

「島牧村にこんなに大切なものがあることを初めて知った」「大平山に登ったことはないけど、たくさんの貴重な花があることを知らなかった」と話す生徒や児童たちは、郷土の自然をあらためて見直し、貴重な大平山の自然を守ることの大切さを学んでいました。

11月19日には滅びゆく高山植物を守るために、盗掘防止ネット主催の市民フォーラムが北大学術交流会館で開かれます。（ひぐち・みなこ　北海道高山植物盗掘防止ネットワーク委員会）

雨の筑波山と丹沢を登りました

１０月１５日、日本山岳会の１００周年記念祝賀会に参加で、東京へ行ってきました。品川高輪プリンスホテルで開催され全国から１０００人の会員が集まり盛会でした。翌日、一緒に参加した畠山廸子さん、宮崎初恵さん、東京に住む佐藤英子さんと案内役の檜山さんとで、雨のそぼ降る筑波山に登りました。登山口から登っても１時間半ぐらいで登れる山ですが、ケーブルカーを使い、山頂駅から、女体山と男体山に登りました。雨にも関わらずたくさんの観光客が訪れていました。信仰の山として知られており、原生林が多く残っていて、落葉樹と広葉樹が混在していました。山中には千種を超える植物が群生しているそうです。

紅葉はまだでしたが、ブナの森が優しく迎えてくれました。茶屋で食事ができるのも北海道ではありませんので雨宿りしながらトン汁であたたまることが出来嬉しかったです。地元の檜山さんにはお世話になりました。筑波駅で解散後、私は埼玉の妹家族の所へ。久しぶりの再会で互いの家族の近況を話し合い、早めに就寝。翌日、妹に神奈川の渋沢まで送ってもらい、近くに住む友人、康子さんと丹沢山をめざして登り始めました。雨が降っているので、止めてもいいかなと思いながら、せっかく東京まで来たのだからと、帰りの飛行機を気にしながらも、二人で登り始めました。さすが平日、登山者はほとんどいませんでしたが、大倉登山口から、丁度３時間で搭の岳（１４９１ｍ）に着きました。登山道は整備されていましたが、階段状の登山道は快適とはいえません。５、８キロの登りでしたが、晴れていたら、きっと眺望のいい山だろうなと想像しながら登りました。笹も低く、広葉樹が明るいです。搭の岳にある尊仏小屋のトイレは有料ですが、とても綺麗に使われており、とても気持ちが良かったです。ティッシュは持ち帰りです。コーヒーが雨で冷えた体に染みとおるように美味しかったです。１００周年の祝賀会も素晴らしかったですが、近郊の山に登れたこともいい思い出になりました。

2005年10月5日　北海道民医連新聞

登別で知里幸恵フォーラム
高まる記念館への期待

樋口みな子

アイヌ民族の口承文学カムイユカラ（神謡）を記録した「アイヌ神謡集」の著者、知里幸恵（1903～22年）の業績を後世に伝えようと、生誕の地・北海道登別市で18日、フォーラムが開かれ、200人が参加しました。登別市の市民団体「知里森舎」（横山むつみ代表）が主催しました。

知里森舎は生地に知里幸恵記念館の建設を目指しています。小野有五・北海道大大学院教授の司会で行われたパネルディスカッション「小さな記念館の魅力について」では、郷土研究家の宮武紳一さん、アイヌ文化伝承者中本ムツ子さん、伊達市噴火湾文化研究所所長の大島直行さん、室蘭市立白鳥台小学校教諭で児童に「銀のしずく」の歌唱指導をしている津田邦子さんがそれぞれ記念館に寄せる思いを語りました。

カムイユカラを歌ったCDで吉川英治文化賞を受賞した中本さんは、「アイヌであることがかつては恥ずかしかった。50歳で生まれ故郷の千歳に戻り、アイヌのおばあちゃんたちのお話を聞くようになって、アイヌ文化の素晴らしさを見直した」と語りました。津田さんは、「子どもたちはアイヌ民族の人から直接、差別や偏見に苦しめられた事実を知ることで理解が深まる。記念館では展示だけでなく言葉でも伝えて欲しい」と語りました。

フォーラムでは、「アイヌ神謡集」に登場するシマフクロウの研究と保護、増殖に取り組んでいる根室市の山本純郎さんが講演しました。山本さんは「シマフクロウは標高800㍍以下に生息するが、森がなくり減少してしまった。多くの写真家がきてヒナが育たなかったこともある」と、貴重なシマフクロウのスライドを使いながら語りました。

記念館は来秋の着工予定で建設募金を呼びかけています。知里森舎☎0143（83）3677。

合唱する室蘭市立白鳥台小学校の児童

火星が地球に大接近

10月31日の夕方、肉眼でもひときわ明るく赤っぽい星がくっきり見えました。星マニアの夫をせっついて、2階から大きな天体望遠鏡を降ろし、自宅の前で観測しました。南東の空にくっきり、赤く輝く火星が鮮やかでした。ぼんやりと縞模様も見えました。11月末まで明るい火星が楽しめます。街中でもよくわかります。
夜空を眺めてみませんか？ 地球に再び接近するのは2018年になります。

本 BOOKs

「森の紳士録」
ーぼくの出会った生き物たちー

池内　紀著
岩波新書　７００円＋税

学生時代から山に親しんできた著者が、月下の散歩者ムササビ、森の怪人ヒグマ、忍びの名人イワナや、枯れ木の職人クマゲラなど、山で出会った紳士（つつましく生きる動物）たちを、鋭い観察力と、あたたかいまなざしで描き出したエッセー集です。

札幌では、市街地にまでクマが出没して話題になりました。ヒグマの行動追跡調査によって、一頭が一年の生活をするためにどれほどの空間を必要とするのかわかってきたという。メスの成獣で年間、約１５キロ平方が平均値という。固体それぞれが毎年ほとんど同じ地域を利用しており、知りつくしたエリアを繰り返し使っている。オスはメスの１０倍以上の面積を徘徊しているという。著者は、ニセイカウシュペ山に登ったとき、ヒグマのエリアに入ったらしく、「標高千メートルを超えると点々と雪渓がある。その上にヒグマの足跡がつづいていた。ときおり腰を下ろしたらしく、巨大な尻のかたちにへこんでいる。下りはおりおりフキの葉がちらばっていた。」とまるで親しい友人に会ったかのように記しています。　忍びの名人、イワナも興味深い。忍者イワナは「昔」に身を隠すという表現が面白い。ある日、渓流沿いの日当たりにいいところでつい、うとうとし始めた著書。そのとき「ピシャリと水音がした。イワナが元気いっぱいに飛びついた。・・・まるで夢の光景に立ち会っているような気がしてならなかった。」イノシシやキツネなど夜の世界に生きる動物の意外な習性など、文献を引用しつつ、ユーモアあふれる文章が楽しい。幻の獣オオカミは、明治のころに伝染病かなにかで絶滅したのだろう。たくさんの伝説を残したオオカミを森の紳士録に加えてやりたいと愛情をこめて記しています。

「大雪山のお花畑が語ること」工藤　岳著

京都大学学術出版会　２１００円＋税

先日、「滅びゆく高山植物を守るための市民フォーラム」で工藤先生による「高山植物と雪の関わり　そして地球温暖化の影響」について」の講演を聴きました。　本書は著者が大学院生であった頃から、１３年間にわたって研究してきた雪渓の作り出す季節性と高山植物の生態について紹介しています。大雪山系は日本最大規模の高山植物の宝庫であり、はるか北極圏に広がるツンドラ生態系に匹敵する多様で、複雑な生態系であることを、証明した記録です。並みの体力では続かない地味で根気のいる調査、研究でした。

雪の積もらない「風衝地」と夏まで残雪がある「雪田」で高山植物の開花時期が違い、そのために狭い範囲で多様な高山植物が共存できること、高山植物は互いに花粉を運んでくれる昆虫を巡って競争していることや、マルハナバチが蜜のある花を選んで訪花していることなど興味は尽きない。また、地球温暖化によって、今まで長い時間をかけて作り出された季節性が撹乱されてしまい、高山植物群落の多様性が大きく損なわれると警告しています。身近な生活から二酸化炭素の排出を少しでも減らす努力や、今ある自然が未来につづくような工夫が必要であることを考えさせてくれました。

『離れ部屋』　申　京淑著　集英社　２３００円＋税　（安　宇植訳）

韓国の女流作家として活躍する著者の自伝的小説です。「１６歳のわたし」が１９歳になるまで、狭いアパートの一室で兄たちやいとこたちと暮らし、劣悪な条件の中で働き、体験したさまざまな人間模様を回想しています。労組の誕生、組合員への執拗な攻撃などで退職していった同僚たち。

大統領暗殺や、光州事件など韓国の激動期に青春を過ごした著者の目に映った社会の底辺に生きる人々の心情と情景が鮮やかです。「離れ部屋」とは社会から隔離された部屋という意味だけではなく、夢や愛、孤独、死が閉じ込められた部屋のイメージをこめて付けたという。声を出せずに生きてきた著者を含めた少女たちの困惑と悲しみ。「わたし」は彼らと同じ視線でみつめ受け止めています。１６歳の頃から作家になると決めていた著者はそのときの感情を丹念に織り起こしていて、過去形ではなく現在形で表現していて新鮮でした。

『女性史研究』　　札幌女性史研究会　１１００円
ほっかいどう 第2号　連絡先　林恒子方　０１１－７８１－６４４３

特集　戦後６０年を考える、国際婦人年から３０年、研究ノートで構成された本書は、銀河通信の読者である二人が執筆しています。「長兄のこと」で写真でしか知らない戦死した兄の足跡をつづった本田明子さん。

遺品の襟章を手掛かりに、兄が学んだ札幌商工学校をつきとめたいきさつなどが書かれ、何人かの方から連絡をもらったり、偶然、明子さんの上司だった人が、兄の戦死した所と近い中国東方で従軍していたことがわかったなど、私にはお兄さんが合わせてくれたような気がしました。

美瑛の岸信子さんは「１９２０年代の農民運動を闘った女性像ー重井しげ子を中心として」と題して重井しげ子の足跡をたどっています。封建的な時代に婦人部の活動は小作争議で活躍することだけが運動の本質ではないと断じ、無産婦人との連携、運動と家庭との両立、婦人参政権の獲得も希求した女性の生き方に勇気づけられる思いがしました。

「ある戦後緊急開拓史ー江別市・新野幌部落のことー」を１０組のご夫婦から聞き取り記録した西田秀子さん。あとがきで「朝夕の散策の途中、森の奥で煉瓦やコンクリートの瓦礫を見つけ、調べてみると５００人の戦後開拓者の生活の痕跡だった。なぜ集団入植し、離農したのか、聞き取りを始めた。」とあります。私も野幌森林公園の近くに住んでいながら、原生林の開墾の歴史はほとんど知らずにきました。当時の開拓の苦労を「薮原に幼を寝かし含ませる乳房も焼けて黒く光りぬ」と詠んだ佐久間光子さんの短歌が紹介されています。８２歳になった光子さんは、野幌森林公園に隣接した「開拓の村」でボランティアの解説員をしているとか。６０年前の山林と笹薮に入植した日を忘れられないと語る佐久間義信・光子夫妻のお話を私も聞きたいと思いました。

丹念に文献を探し、または聞き取り調査など、無名の人々の歴史に光をあてた民衆史から、時代の空気が伝わってきました。

映画

『輝ける青春』

イタリア
監督　マルコ・トゥリオ・ジョルダーナ

「輝ける青春」の兄（左）と弟

一家族の６０年代からの４０年近くを描いた６時間の大作。ローマの兄弟姉妹と彼らの友人や恋人たち。６～７０年代に青春期を過ごした後、兄ニコライは精神科医に、弟マッティオは刑事にと対照的な生き方を選びます。

フィレンツェの大洪水とボランティア活動、大学紛争での学生と機動隊の衝突。テロや、マフィアと司法の対決、精神障害者に対する人権無視の処遇の改革とイタリア社会の記憶に残る事件の数々が語られます。いつの間にか私も兄弟の同行者となり、見終わったときには４０年近い歳月を彼らと共に生きた気持ちにさせられました。登場人物と一緒にイタリア各地を旅する楽しさも味わいました。繊細で奥行きのある人間群像を見事に描き、彼らの悩みや苦しみが我がことのように感じました。二世代にわたる登場人物が、トスカーナの丘の上の別荘に集まり、新たに歩みだすシーンが印象的でした。

『海を飛ぶ夢』スペイン　監督　アレハンドロ・アメナーバル

今年のアカデミー最優秀外国語映画賞を受賞した作品です。

２５歳の時、海の事故で首から下の体の自由を失ったラモンは２６年間、寝たきりの生活を続けていました。ラモンは尊厳死を決意し、弁護士を招んで法廷闘争に持ち込みます。

優しい夫を持つ女性弁護士は大きな病気を抱え、ラモンの気持ちを理解します。オペラを愛し、詩を書くラモン。ラモンに惹かれていく女性の変化と交流が人間とは何かを見せてくれます。残される家族や恋人の苦悩も伝えて、それでも、本人の意思を尊重とする選択は重たい。窓を超えて海まで空を飛ぶシーンは自由を願うラモンの思いが切なく美しい。私がもし体の自由を失ったらどうするだろうかと深く考えさせられました。

お便り

◆今回は山のニュースがたくさんで嬉しい思いです。かつては毎年行っていた登山でしたが、肺がんの手術後、肺活量が少なくなり坂道、階段が息切れする状態です。目下はパークゴルフです。術後８年、年齢もそれなりに増え、山行は困難に・・・。パークゴルフは術後のリハビリに最適でした。忙しい合間を縫って児童文学学校に通っています。作品集ができましたので送ります。楽しい、悲しい、寂しい等の形容詞をつけてはいけないのです。（北広島市　０・Ｆさん）
◆国彦の遺稿集に対するコメントがあり、ありがたく読ませていただきました。今、春光台公園の工事の問題に取り組んでいます。春光台公園の子どもの遊び場、冒険広場にパークゴルフ場を作らないでという署名です。ミズバショウの保全の問題もあります。子どもたちに少しでも良い環境を残すのが私たち音なの使命ではないでしょうか。（旭川市　三浦恵美子さん）
◆「女性史研究ほっかいどう」をお届けします。本田明子さんや、知里幸恵の母ともゆかりのブライアントも出ています。私は農民運動（日農婦人部づくり）に岡山と北海道を中心に奔走した重井しげ子をたどりました。（美瑛町　岸伸子さん）
◆兄の子の心臓移植は２月に渡米して７月１日にドナーの方がみつかり手術を終えました。通信に載っていた水野スウさん、山口の友人が家を週１回オープンハウスにしていてスウさんの本を２冊買ったところでした。新琴似の図書館で、知里幸恵ノートのお話をします。（札幌市Ｍ・Ａさん）
◆銀河通信を楽しく拝見しています。みな子さんの明るい笑顔と文章からパワーをいただいています。（芽室町　Ｓ・Ｙさん、Ｓ・Ｒさん）
◆市民フォーラムで小柄なみな子さんが２０日の高橋尚子のように巨人に見えました。
（札幌市　Ｋ・Ｋさん）

購読料をありがとう０５・１０・３～１１．１２

佐々木悦子（札幌市）　大久保フヨ（北広島市）　西原重雄（斜里町）　森武昭（狛江市）　芳賀孝郎・淳子（千葉市）　海川敏男（函館市）　畠山廸子（札幌市）　梅沢俊・節子（札幌市）　星原信之（札幌市）　折井聡夫（越谷市）

カンパも含めて１９４００円は、印刷、送料に使わせていただきます。ありがとうございます。写真家の梅沢俊さんからは卓上カレンダーもいただきました。ありがとうございます。来年もご愛読くだされば幸いです。賀状をかねた新年号は１月１０日ごろまでには発行したいと思います。

１０月１５日開催の日本山岳会百周年記念祝賀会で、青森支部のみなさんと